
はしがき

サツマイモは、江戸時代初めの1605（慶長10）年に琉球王国（沖縄県）へ伝来してから400年余となる。特に、江戸中期から太平洋戦争後の1950（昭和25）年までの間には、大飢饉や戦争による食糧難から多くの国民の生命を救った。

司馬遼太郎は、『街道をゆく 8』（朝日文庫）の『種子島みち』の中で、「カライモの伝来というのは、農民の露命を繋ぎとめる上での画期的大事件であった。その感謝が、カライモをもたらした人を神として祀ることになったわけで、こんにち飢餓体験の記憶が遠いものになっているわれわれでも、当時のひとびとの気持ちが十分想像できる。」、さらに「薩摩藩そのものはコロンブスによってアメリカ大陸で発見されたものなのである。まわりまわって江戸中期以後の日本人の生命をこのことが繋いでくれることになったのだが、コロンブスの新大陸発見の影響の第一にこのことを挙げている社会科教科書が一冊でもあるだろうか。べつに感謝ということではなく、事実認識ということは、およそそういうことだという気がする。」と述べている。食糧危機に直面した時には、私たちの生命を連綿と繋いでくれたサツマイモを例に、「事実認識」の重要性を指摘した司馬史観の慧眼^{けいがん}に改めて敬意を表したい。

しかし、高度経済成長の出発点となった1956（昭和31）年を境に、サツマイモの食糧における地位は低下し、1966（昭和41）年には米の国内自給率が100%を達成したことを契機に、その低落傾向は決定的となった。その後もサツマイモ消費の長い低迷期が続く。ところが、21世紀に入ってまもない2005年頃から、焼きいもやサツマイモを使用したスイーツの静かなブームが起り、サツマイモの優れた機能性成分が注目を集め、健康・自然食品として素朴な味が再評価を受けるようになった。今日では食糧難時代における救荒作物^{きゅうこう}としての役割だけでなく、健康の維持増進にも寄与する優れた農産物、加工食品として、老若男女から人気が高まりつつあることは嬉しいことだ。

本書は、財団法人いも類振興会が発行している「いも類振興情報（季刊）」No.106～No.109（2011年1～10月）に連載した「甘藷問屋川小商店135年の軌跡ー生産・流通・消費からみたサツマイモの歴史ー」がベースとなっている。そして今回、序章と終章を新たに起こし、第Ⅰ章～第Ⅳ章についても大幅に加筆して再編集したものである。

本書は、序章、第Ⅰ章～第Ⅳ章、終章の6章から成り、老舗^{かんしょ}甘藷問屋の川小商店^{かわこ}が136年間に辿った商いの軌跡を縦糸とし、その間のわが国におけるサツマイモを巡る政策、生産・流通・消費と社会・経済動向を横糸として織り込み、「サツマイモの近代現代史」として綴ったものである。

「序章 サツマイモの前史」では、サツマイモの特性のほか、その起源を辿りそこから世界への広がり、さらに日本の江戸初期から明治維新に至るまでの^{でんぱ}伝播について概観した。つまり、本書の主題である「サツマイモの近代現代史」の前史について、その基礎的な知識を紹介している。次いで、「サツマイモの近代現代史」を、サツマイモを巡る政策、生産・消費の動向のほか、社会・経済の転換点を考慮して4つの時代に区分し、4章立ての構成とした。すなわち、「第Ⅰ章 サツマイモの生産・消費が拡大した明治・大正期」、「第Ⅱ章 戦時下における甘藷配給統制の昭和前期」、「第Ⅲ章 サツマイモの生産過剰と用途転換を進めた昭和中期・後期」、「第Ⅳ章 サツマイモが再評価され始めた平成期」とした。「終章 未来へ生命を繋ぐサツマイモ」では、サツマイモに関する歴史的な認識などについて総括した。

日本史における時代区分によると、「近代」は1868（明治元）年の明治維新から1945（昭和20）年の太平洋戦争終結までを、「現代」は太平洋戦争終結から現在までを指すので、本書もこの区分に依った。したがって、第Ⅰ章から第Ⅱ章までが「近代」であり、第Ⅲ章から第Ⅳ章が「現代」となる。この4つの時代区分は、川小商店における甘藷商いの軌跡に照らしても、それらの時代区分が甘藷問屋経営の大きな転換点となった時期とほぼ一致している。

なお、サツマイモの呼称、表記は、現在でも地名や歴史由来などから様々である。例えば、唐芋（からいも、カライモ）、蕃薯（ばんしょ）、琉球芋（りゅうきゅういも）、ウム、薩摩薯、薩摩芋、さつまいも、サツマイモ、孝行いも、甘藷、甘しょ、かんしょ等である。ちなみに、学名は *Ipomoea batatas*(L.)Lam.（イポメア・バタータス）である。英名では sweet potato、ラテン系言語名（中南米）では、batata、batata doce、patata dolce、camote、boniato となっている。本書では、現在の学校教育で使用されている「サツマイモ」の表記で統一した。ただし、「甘藷」などのように固有名詞的に使用されてきている場合には、その表記を尊重した。

本書の執筆には次の動機があった。サツマイモの歴史に関連する主な文献としては、日本甘藷馬鈴薯株式會社著『さつまいも及びじゃがいもの渡來』（1948年、新生社）と宮本常一著『甘藷の歴史』（1962年、未来社）が挙げられよう。前者は太平洋戦争終結までのサツマイモに関する記録、全国各地の伝承などを基に、その伝来、伝播、品種の由来を中心に編集されている。記述内容の信憑性に一部問題が残るものの、大変貴重かつ重要な文献である。後者は民俗学（文化人類学）者であった著者自らが昭和37年以前までの間に日本国内を旅して、民俗学の視点から甘藷の歴史をまとめたもので、含蓄のある内容となっている。一方、サツマイモの育種に長年携わった研究者による代表的な著書が二冊ある。小林 仁著『サツマイモのきた道』（1984年、古今書院）と坂井健吉著『さつまいも』（1999年、法政大学出版局）である。両著とも学術的な内容を多く含むが、サツマイモをわかりやすく解説した好著である。しかし、紹介した4書とも、サツマイモの近代現代史そのものに焦点をあて、そこに力点が置かれているわけではない。そのような状況を踏まえて、近代国家形成の夜明けとなった明治維新から現在に至る約150年間の、サツマイモを巡る歴史を鳥瞰^{ちようかん}してみたいと考えるようになった。

そのような折りの2009年に、日本経済新聞の「200年企業一成長と持続の条件―」が目にとまった。その連載記事は2012年9月末現在までに、

全国の200社が紹介されている。それらの長寿企業が辿った歴史から、学ぶことが多い。幸いサツマイモの分野でも、老舗甘藷問屋である「川小商店」があった。川小商店の軌跡を辿れば、サツマイモの近代現代史を浮き彫りにできるにちがいないと考えた。殊に、同商店の主要な取り扱い商品である焼きいも、大学いも、スイーツなどの加工食品の歴史も併せて折り込めば興味深い内容になるであろうと思った。

以上の趣旨を川小商店の齋藤興平会長にお話し、理解を得て「いも類振興情報」に「甘藷問屋川小商店135年の軌跡」と題して、“川小商店物語”を連載したのである。さらに今回、その連載内容を基に単行本として再編集し出版することができた。本書の執筆にあたっては、川小商店から甘藷関係資料の提供、聞き取り調査に全面的なご協力をいただいた。また、出版にあたり(株)丸井工文社の飯村 悟さんにお世話になった。ここに記して心よりお礼申し上げる。

本書はサツマイモ関係者にとどまらず、広く消費者・学生などの皆様にも活用いただきたい。そのことによって、サツマイモに対する理解と歴史的な認識が一段と深まり、さらには将来の生産振興、消費拡大にも結びついていくことを期待している。

2012年10月 狩谷 昭男